



—美術との出会いは？

小さい頃から絵を描くのが好きで、漫画家になりたいと思ったこともあったんですけど、高校の美術の先生に油絵の魅力を教えていただくなかで、美大の油絵科に進学したいと思うようになりました。

—部活は美術部だったんですか？

小学校のときは姉の影響で、三姉妹全員陸上水泳クラブだったんです。中学校から私は美術部に入って、高校は美術部と写真部でした。

—それは予兆じゃないですか(笑)。

そうですね(笑)。写真部はたまにモノクロで友人を撮影して現像している程度で、ほとんど出ていなかったんですけど。

—美術部ではどんな絵を描いていましたか。

学内だったり、地元の風景を描いていました。—高校は川越女子高校で、ご出身は東松山市なんですよ。

そうです。高校の校舎や桜並木、東松山の公園やトンネルとか、日常よく目にする景色を描いていました。

—一人は描けなかったんですか？

自画像以外で人を描いたことは、あまり……友人を描いたことはあったんですけど。

—川越女子高校は勉強をがんばっている学生も多かったと思いますが、美大に行くことに反対されたり、迷いを抱えたりすることはありませんでしたか。

自分の場合は迷いはなくて、結構早い段階から美大に行きたいと思っていました。

—進路によってクラスが分けられていた？

3年生になると文系のクラスだったんですけど、そのなかでも美術や服飾系に行きたい子が多いクラスでした。美術系に行った子は10人前後で、今も作家をしている同級生が数名います。—東京造形大学に進学して、大学でもずっと油絵を描いていたんですね。

そうですね。風景とか植物を描いていました。当時描いていた風景は、日本人だったら写真などで一度は目にしたことのあるような景勝地のポスターをもとにしていました。

—風景を直接描くのではなく、編集されたイメージを絵画にすることですか。

駅に貼ってある観光地のポスターの、デザインされて文字とか路線図とかいろんなものが組み合わされたイメージに惹かれて描いていました。

—モチーフの選び方が面白いですね。

ポスターのイメージが物質として経年劣化するところに惹かれて、そのまま絵画として描きたいと思ったんです。ペインティングナイフを使ったり、色を単色にしたり、抽象化したりして景勝地を描くことで、観る人の記憶によっていろんな風景に見えたら良いなと思っていました。

物質とイメージの必然的な関係性を作品にしていきたい

—現在は写真を手法として用いていますが、風景画から写真に変化していったのはなぜですか。

大学は、なぜ絵画を描くのかと立ち止まって考える機会を与えてくれた場所だったと思います。そのとき、自分は物質性とイメージを同時に知覚するということに惹かれているな、と思って。その頃は芸術祭が盛んになっていた時期で、場所性とか、コンセプトにあわせて素材が選ばれることに興味があったんです。支持体と描かれるイメー



ジの関係性を自分なりに納得するかたちで作品をつくりたいと思うようになっていました。

—越後妻有などの地方芸術祭がはじまって話題になっていた時期ですね。

その頃に美術館で古い写真の展覧会を観たんです。ダゲレオタイプという写真が「記憶をもった鏡」と呼ばれていることを知って。銀メッキされた銅板に、写真が化学反応で定着されている、世界で最初に流通した写真と言われる技法なんですけど、それがすごく物質的だった。それまで写真は画像でしかないと思っていたんですけど。

—ダゲレオタイプは一点ものですね。

それから、古い写真の銀鏡反応が起きているものとかも、すごく物質的だなと思うようになって。写真というものの物質性とイメージに惹かれてきました。

—すぐに絵画から写真へ移行できたのですか。

たまたまアルバイトをしていた美術予備校の、誰も使わなくなった暗室に、写真の技法書が置いてあったんです。その技法書に、ゼラチン乾板の感光乳剤が紹介されていて。それを塗れば何でも印画紙にできるという魔法のような感光剤があることを知って。実際に買って、いろんなものに塗布してみても。これがあれば自分が考えていた支持体とイメージの必然的な関係性が作品にできるのではないかと考えるようになりました。

—そうした出会いが、現在の表現へとつながっているんですね。

絵画から写真に移行した経緯はいくつかあり

ました。オパール加工というテキスタイルの技法があつて。植物性と、化学繊維もしくは動物性の繊維で混合された布に、酸性のインクを乗せて、加熱処理をして焦がして水洗処理をすると、酸に弱い植物繊維の部分だけが抜け落ちることで透かし模様ができる技法で。自分が描いた部分が失われることでイメージが立ち上がってくる絵画を描こうとしていた時期もあつたんです。そのときに、自分の絵筆を介して対象物が抜け落ちるのではなくて、対象を写真製版した版を通して、そのもの自体が失われていくということをしてみたいと思うようになって。そのために写真を撮りはじめたということも、作品の変化のきっかけのひとつでした。

一絵画から写真に移行したというより、自分の表現したいものを追求していく過程のなかで、自然に選びとった方法論として、絵画から写真につながっていったということでしょうか。

イメージと支持体の関係がはじめのきっかけだったんですけど、写真製版にしようと思ったのは、自分が描くのではなくて、もっと客観的なイメージにしようとしたんです。写真はイメージの生成のされ方が絵画とまったく異なっていて、人間の手を介さずに自然現象から生まれてくる。あと、絵画がもっている時間と、常に過去をあらわしているという写真の時間性が大きく異なるということも、制作しているなかでだんだん感じるようになりました。

一絵画は基本的に画面の隅々まで作家の意図が



反映されます。でも写真は、逆に作家の意図を消していくことができる。

写真ってやはり客観的なメディウムだなと思います。自分は時間の経過したモノにとっても惹かれて、モノのまなざしや記憶を写真によって可視化したいということに興味が移って行って……

場所の記憶やモノの記憶をかたちにしたいと思っています

一絵を描いていたときは、まだそれほどモノには関心が向いていなかった。

そうですね。そのときは何を描きたいかを模索しながら、自分が惹かれたものをモチーフにしていたんですけど、大学を卒業したときに、西早稲田にある戸塚小売市場という場所が、あと1年で閉鎖されることになって。

一戸塚小売市場というのは、どういう場所ですか。

建物の地下にあつて、上が教員用住宅になっていて、荒物屋さんや魚屋さんや八百屋さん、食料品屋さんや燃料屋さんなどの小売りのお店が入っていて。3分の1が空き店舗になっている状態で、最後の1年にアートプロジェクトとして何かできないかと早稲田大学の学生が新宿区から依頼されて、自分も友人の紹介で美術担当として携わることになったんです。

一面白そうなプロジェクトですね。

空き店舗でリサイクルショップをしていたんですけど、地域の方の不要になったモノを無料でいただいて、それを販売したり、リメイクしたりして付加価値を与えることで買ってもらおうお店をしていました。その売上を、お店を手伝ってくれた障がいのある方のお給料にできたらというかたちで運営していたんです。それが、不要になったモノがどういう来歴をもっているか、どういう記憶をもっているのか考える機会となりました。

一モノの記憶への関心のはじまりですか。

当時はまだ絵を描くことと、モノについて考え



Other Days, Other Eyes: 田中邸さくの間の窓

解体された家の窓、写真乳剤 2022年 1373×1675×30mm

ることが一致していなかったんですけど、そういう経験を経て、だんだんモノの記憶をどう作品であらわすかということに関心が移って行きました。

一時間の蓄積を可視化するような試みですね。

ヴァナキュラー写真と呼ばれる、土着的で俗っぽい写真、亡くなった方の毛髪や思い出の品と肖像写真を組み合わせたり、半立体にすることで、亡くなった方の写真に存在感を与えようと残された遺族によって工夫された写真を見る機会があつて。写真とモノが組み合わされることによる物質性とイメージというものに、とても惹かれました。

一ヴァナキュラー写真というのは、いわゆる作家的な写真でない、職人的だったり、素人の家族写真だったり、これまで芸術作品としての評価の外側にあった写真群のことをさしますが、鈴木さんにはヴァナキュラー写真のように作品を撮りたいという気持ちがあるのでしょうか。

自分が作品にしているものが、名もなき人びとの記憶だったりするところは、ヴァナキュラー写真と呼べるのかなと思います。ヴァナキュラー写真には、人間の肖像写真が多いんですけど、場所の記憶やモノの記憶をかたちにしたいと思っていたので、庭の肖像や、木の肖像、家の肖像のようなイメージで作っていたところもあつて。そういった意味で、ヴァナキュラー写真のひとつでありたい、とは思っています。

一話を戻すと、戸塚小売市場のプロジェクトにかかわることで、モノへの関心が強まっていった。



それまでも、古着をリメイクして身につけることは高校生の頃からしていました。新しい服を買いお金もなかったのも、古着をリメイクすることで、自分らしいと思えるものを身につけたかった。モノと向き合って、どう手を加えたら、そのモノが魅力的になるか、どういう素材がいちばん合うのか、そういうことを考えるのが昔から好きでした。

一古着の関心からはじまったんですね。

はじめは自分が身につけるためのものだったんですけど、他の作家さんの仕事や美術作品を観ているときに、古い素材を選択するコンセプトに惹かれることが多くて。恣意的にゼロから作られたものよりも、自分もモノありきで作品をつくりたいと思うようになりました。

一それから窓をつかって作品にするようになった。

はじめはオパール加工の布をカーテンのように窓の手前に設置していたんですけど、窓ガラスを支持体にして窓から見える風景を定着したいと考えるようになりました。でも、どこで使っていたのかがわかっている窓に出会う機会がなかなかなくて。中古で出回っているアンティークの窓は、どこにあったかわからないものが多いんですね。一たしかに、来歴のわかる窓と出会う確率は低そうですね。

そういう窓を探しているときに、当時アトリエ兼展示場所として借りていた関井記念館という浦和にある古民家の台所の床下に、ひび割れた木枠の窓が保管されているのを見つけたんです。その窓がどこにあったかを調べて、現在はアルミサッシに取り換えられている2階の窓と大きさが合うし、ひび割れていることで交換したものなのだろうと推測して、その窓から現在見えている風景を木枠の窓に定着させたのが最初でした。

一探していたものが、すぐ近くにあったという話は良いですね。

その後は、中之条ビエンナーレなどの芸術祭に参加したりするなかで、不要になった窓がどこにあったのかを取材させてもらって、かつて窓か



Other Days, Other Eyes: 田中邸2階寢室の窓

解体された家の窓、写真乳剤 2022年 1292×820×51mm

ら見えていた風景がわかるものだけを作品にして。鏡も、実際に誰が使っていたのか、何を映してきたのかわかるものだけを作品にしてみました。

窓や鏡という素材は、 絵画や写真のメタファーになる

—実際に壁に展示されると、額縁に入った絵や写真のように見えます。

窓や鏡は、絵画にとっても写真にとってもメタファーになるものなので、そこは意図的に選択していました。窓の構造自体を再現するように展示したら、さらに窓枠があるような立体的な方法もできるんですけど、平面の額装された絵画作品と同じように平面的に設置されることで、窓でもあるけれども絵画や写真のように見えるものであったらいいなと思っていました。

—ずっと窓や鏡を素材に選んでいましたが、近年は眼鏡などもう少し小さなものや、外国製の素材に変化していますね。

今回展示している窓の作品ですが、Other Days, Other Eyesというシリーズ名がついています。それは、北アイルランドのSF小説家のボブ・ショウが書いた、同じ名前のSF小説からタイトルを引用しているんです。小説のなかに、光の透過を遅らせるスローガラスという空想上の発明品が出てきて、たとえば10年ものスローガラスが田園地帯から都市に持って来られたときに、10年間田園風景を映し続けるんですけど、それが自分の作品と似ているなと思って。

—たしかに、昔の風景を写す窓や鏡というのは、どこかSF的な印象を受けます。

自分が焼きつけているものが、ピンホールカメラの原理を利用しているシリーズだと、また違う素材だったりするんですけど、鏡や窓はガラスでできているので、自分のなかではスローガラスとしてつながっているところもあったんです。

—イギリスへの在外研修も変化の理由でしょうか。

私が滞在していたベルファストは、タイタニック号が建造されたことで知られる造船で栄えた都市で、そのアンティークショップや蚤の市で、舷窓、船の丸窓が売られていたんです。はじめは舷窓も、どの船にはめられていたかわからないので、自分の制作のやり方だと、何を見ていたかわからないのではないかと思ったんですけど。

—今までの基準では選ばなかった素材ですね。

ただそれが、船という可動性のあるものだったので、私が推測する余地があると思ったんです。舷窓にはグラスゴーの会社の刻印があったので、少なくともベルファストとグラスゴーをつなぐアイルッシュ海を渡ったことのある窓なんじゃないかと考えて、ふたつの地点を行き来しているフェリーから撮影した海と空の風景を定着するという作品を制作したんです。

—舷窓の作品は、想像力が刺激されて好きです。

ありがとうございます。その舷窓の作品がきっかけとなって、家の窓のような動くことがないものだったり、鏡のような特定の人が使っていたものとは異なって、時代とか国とか用途から、そこから何が見られていたかを推測することができるんじゃないかと考えるようになりました。

—作家として、より主体的な姿勢が発揮できる。

その後は、レンズがはめられているものに関心が移っていきました。写真の黎明期にどうしてもが見られていたか関心があったこともありますし、レンズというものが、言語学の言葉で言うと「シフター」と呼ばれるような、指示対象とされるものをあてがわれるのを待っている空虚な転換子のような、見る対象がないと意味をなさないものであると考えると、その対象物が何であったのかを私が推測することは、指標的な制作方法としてありえるのではないかと思ったんです。

—これからも展開の可能性があると思いながら、作品を拝見していました。しかも日本国内だけでなく、さまざまな国や地域の歴史にも接続する。写真という共通点があるから、時代としては近代以降になる



Other Days, Other Eyes: 田中邸台所(旧女中部屋)の窓
解体された家の窓、写真乳剤 2022年 765×805×30mm

と思いますが。

ありがとうございます。そうですね、19世紀以降になります。でも、たとえば鏡ですと、写真を見たことがある人と見たことがない人がどっちも見ていたかもしれないので、写真発明以前からある鏡が何を見ていたのかとか、見え方も違っていたのかなとか、そういうことも気になります。

一近代産業のはじまりで、社会が大きく変化していく時代。でもまだ、その変化が大きくなりすぎて人間の実感が追いついていけなくなるよりも前の、どこか懐かしい雰囲気も残っていて。そういう時代の変化を映し出していく気がしますね。

そうですね。写真はそういう時代に、つくられるべくしてつくられたものでもあると思いますし、大量生産が可能になった時代だから、支持体が特定の誰かの記憶と言うよりは、その時代の、その土地の文化の記憶としてあらわれてきたら良いなと思いますね。

潜像を可視化するだけでなく、 流れていた音についても考えたい

一今回は川越で展示するという事で、当初は養蚕に関心を寄せていらっしゃいましたよね。川越周辺の地域、富岡製糸場から横浜港に向けての道は、近代化の時代に養蚕と切り離せない記憶を残しているわけですけど、結果的には、今回の展示では実現できなかった。

日本の近代化を考える上で、養蚕はとても重要なものだと思います。顕微鏡や虫眼鏡で何が見られてきたかをリサーチしていると、蚕の卵が見られていたり、絹織物の折り目を見ていたりということもわかって。レンズを通して見られてきたもののなかに、養蚕の歴史が入ってきている。でも今回作品として展示するにいたらなかったのは、自分のなかでまだ作品の構成の落としどころというか、決着がつけられなかったというところがあって。



会場写真撮影 鈴木 のぞみ

一もちろん、制作のためには、リサーチだけでなく、モノとの出会いという要素もありますね。

養蚕に限らず、川越の骨董市とか、関東の骨董市に足を運んで、レンズのはめられたモノを見ていたんですが、以前に窓を探していた頃は出会ったものありきで展示していたんですけど、今はどういったもので構成されて展示をつくるのか

ということに能動的になっている分、現時点で手もとにあるものから展示を構成するにいたれなかった。それに、蚕を作品にするとしたら、飼うところからはじめたいという気持ちもあって、それが今回はできていなかったです。

一たしかに蚕を飼って育てて、となると長い時間が必要になりますね。でも川越総合高校の養蚕資料

室の見学にも行かれたりしていて、制作の準備は着々と進めていらっしゃるんですよね。

埼玉において、養蚕は本当に重要な記憶だと思います。近代化を支えた一方、女工の過酷な労働環境や、生糸価格の大暴落による農民の武装蜂起である秩父事件を生み出すなど、さまざまな社会課題にもつながっています。

父の実家がかつて養蚕農家を営んでいたこともあり、養蚕に興味をもって作品にしたいなと思ったのは10年くらい前からなので、いつかならずかたちにできたらと思います。

一結果的に今回の展覧会は、ピアノのある空間というコンセプトにシフトしていくわけですが、展示の構成についてお聞かせください。

今回展示している窓は、1934年に清水組(現清水建設)が建設した田中邸が、2020年に取り壊されることになったときに、古道具屋をしている友人に声をかけてもらって、私が何か作品として残せたらということで、解体する前に撮影させていただいた風景を焼きつけた作品です。

一音楽家夫妻の住む家の窓だったんですね。

NANAWATAの展示は、ピアノがあって、BGMでクラシックのピアノ曲が流れるという初めての機会でした。音楽は記憶を想起させるし、以前から展示で音も使ってみたいと考えていたの、窓にひそんでいたであろう潜像を可視化するだけではなくて、そこに流れていたであろう音もBGMで選曲させていただいたり、ピアノのコンサートで実際にゆかりのある方に当時の田中邸で演奏されていたであろう曲を演奏していただくことで、そこに潜んでいる音についても考えることができたらいなと思って。そうすることで物質としての窓と、視覚的なイメージだけではなくて、音というものも含めて作品を知覚してもらえたら、これまでの私の展示では出てこなかった空間の雰囲気や時間が生まれると考えたんです。

今回、レンズの展示をやめたのは、小さい展示物だけの構成になることも、空間に合わない気がしたからです。窓とピアノで構成した方が、空間に合うのではと思いました。

一たしかに、空間に合っていると思います。音楽も加わって、いわゆるメディアミックスなのかもしれないけれども、決して時代の先端ではなくて、ちょっと古風な雰囲気のメディアミックスですよ(笑)。

たしかに(笑)。

一空間の風景と音を組み合わせるという展示は、今なら映像を撮影したりして、技術的にも簡単にできるようなっているわけですが、だからこそというべきか、逆に古風な手ざわり、物質の存在感が際立つ時代なのかもしれませんね。今回の展示も、かつて本当に使われていた窓が現在も残って、場所を変えて実際に展示されているという、物質というものの説得力をあらためて感じました。それが鈴木さんの作品の芯の部分なんだと思います。

今回は、ひとつの家にあった窓だけで展示を構成することで、モノ同士がすでに持っている関係性、作用し合う力に委ねていました。展示空間に、NANAWATAのオーナーさんがBGMをかけてくださった瞬間に、自分でもドキドキしたというか。BGMってずっと耳に入ってくるときと、流れていてもそんなに気がつかないときと、観る人のそのときの気持ちで経験として変わるものだと思います。自分でも、今までの自分の作品を空間で経験するのとは少し異なる気がして。

一曲のリクエストはどのようにされたんですか？

東京音楽学校の教授だった田中規矩士さんのリサイタルで演奏された曲目を、オーナーさんが有線のリストから選んでプレイリストを作成し順番通りに6曲かけてくださってます。

BGMで音を再現してもらって、最後の演奏会ではゆかりのある方が考えてくださる田中邸にふさわしい曲が流れるというかたちになりました。一壁や照明の雰囲気はもちろん、もともとあった机や椅子の色調も含めて、今回の展示は、ぴったりとNANAWATAの空間にはまっている気がします。その上、窓にひそむ音の記憶にも関心を寄せながら、ゆっくりと時間を過ごしていただけると嬉しいです。2度にわたって長い時間お話を聞かせていただき、どうもありがとうございました。

2022年7月19日、アトリエにて
+2022年8月2日、オンラインにて
聞き手:岡村幸宣



鈴木 のぞみ すずきのぞみ

1983 埼玉県生まれ
2007 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業
2015 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了
2019 平成30年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスにて研修
2022 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現研究領域博士後期課程修了

主な個展

2016 「去りにし日々の光」アンスティチュ・フランセ東京 ギャラリー、東京
2017 「Mirrors and Windows」表参道画廊、東京
2017 「Monologue of the Light」rin art association、群馬
2018 「Re-collection」信州大学松本キャンパス内旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫/awai art center、長野
2020 「Light of Other Days -『The Rings of Saturn - An English Pilgrimage』」Flax Art Studios、ベルファスト/イギリス
2020 「Unknown Image Series no.8 #2 Light of Other Days-土星の環」void+、東京
2021 「The Rings of Saturn / Mirror with a Memory」rin art association、群馬
2022 「LIGHT OF OTHER DAYS」コートヤードHIROO ガロウ、東京

主なグループ展

2015 「中之条ビエンナーレ2013」丸伊製材、群馬
2015 「Sight-Seeing」Combaz7 Artist in Residence、クランモンタナ/スイス
2016 「WALK ON THE SEA - 海の上を歩く」53美術館、広州/中国
2016 「NEW VISION SAITAMA 5 - 迫り出す身体」埼玉県立近代美術館、埼玉
2017 「記憶の空間」Art & Culture Space Yeoinsuk、群山/韓国
2017 「無垢と経験の写真 日本の新進作家vol.14」東京都写真美術館、東京
2018 「MOTサテライト2018 秋 うごきだす物語」白河二丁目町会会館/大島倉庫、東京
2018 「CSP5 志向と選択」東京造形大学附属美術館、東京
2019 「あしたときのうのまんなかで」はじまりの美術館、福島
2021 「時点」rin art association、群馬

受賞歴

2015 群馬青年ビエンナーレ2015 ガトーフェスタ ハラダ賞
2015 TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD 2015 #5 後藤繁雄賞
2015 アートアワードトーキョー丸の内2015 フランス大使館賞
2016 現代美術の展望VOCA展2016 VOCA奨励賞

パブリックコレクション

アーツ前橋/東京都写真美術館/第一生命保険株式会社/ガトーフェスタ ハラダ